道

m i c h i

2

2023　No. 57

世界救世教　明主様と聖地に直結する会

嘘と幸福

私は約三十年前信仰生活に入ったのであるが、それまでの私は、その考え方がまことに不徹底であった。というのは、悪いことはすべきものではない、善いことをしなければならない、ということはつねに思ってはいるが、さてそれを実行に移そうとなるとどうも勇気がでない。というわけで、善悪ともにはなはだ微温的(ぬるまゆてき)であった。〈中略〉ところが信仰がだんだん深まるにつれて霊界と現界との関係はもちろん、神様のご意志というものがはっきり判り、考え方が断然変ってしまったのである。〈中略〉悪いことは想像以上大きな罪になり、善い行いはこれまた想像以上善果を得るということで、ここに心境の一大変化とともに、悪を絶対排斥し、善を極力実行に移すというように方針が変ったのである。ところが驚くべしそれからというもの、運勢が不思議にひらけはじめた。これなるかなとますます自信が強まり、実行すればするほど、それと交換するかのように良いことがブツかってくる。もちろん多数からの信頼も日に深まるというわけで今日におよんだのである。これはまったく幸福の哲学でもあろう。

以上私自身の体験のみではない。世間多くの人を見るにつけ一生懸命努力するにかかわらずどうも思うようにいかない。時には躓(つまず)いたり、損をしたり、骨折る割に人から好く思われない、信用もされないというわけで悲観する人がよくあるが、そういう人を仔細(しさい)に観察してみると、かならずどこかに間違いのあることを発見する。とくに嘘を平気でつくということが一番悪いのである。〈中略〉とくに信仰者は神様から選ばれたのであり、世人の模範たるべく約束されており、なおさら道に外れることはできない。どこまでも俯仰天地(ふぎょうてんち)に愧(は)じないという心境であらねばならないので、そういう人こそ神様から愛されるからご守護も厚く、心は常に明朗で、悠々として生活を楽しみ、敵を作らず、怨みを買わず、多くの人から尊敬を受けるようになるから幸福者となるのである。

特に注意すべきは嘘をつくという一事である。殊に日本人の嘘つきということは世界的に知られているが、まったくその通りで、常に嘘をつく人は、それが習性にまでなってしまって、自分はあまり嘘つきとは思っていないようになるものである。こういう人は自分の心の標準を高く揚げて、鋭い批判をしてみるといい。必ず嘘発見ができるわけである。それについてあまり人の気がつかない嘘を書いてみよう。

それは約束時間を守らないことである。おそらく日本人中約束時間を厳守する人は幾人あるであろうか。この点外国人の時間厳守の話を聞くたびに私はうらやましく思っている。時間を約束して守らないということは人を騙したことになり、立派に嘘を吐(つ)いたことになる。嘘ばかりではない。相手を怒らせるからこれも罪になる。罪の二重奏である。ところが日本の社会では時間を守らないことが当然のようになってしまって、これに関心を払う人はまことに少ないようである。昔から嘘つきは泥坊のはじまりという諺があるが、あるいはそうかもしれない。泥坊でないまでもいささかの誤魔化しくらいはやるかもしれないと想われるのである。〈後略〉

(「地上天国」173号 昭和39年2月1日)

国宝　紅白梅図屏風　尾形光琳　江戸時代（１８世紀）　ＭＯＡ美術館所蔵

光琳が宗達に私淑し、その画蹟に啓発されながら独自の画風を築き上げたことはよく知られている。水流を伴う紅梅・白梅の画題や二曲一双の左隻右隻に画材をおさめる構成のやり方がそれである。しかし白梅の樹幹の大部分を画面外にかくし、紅梅は画面一杯に描いて左右対照の妙をみせ、中央に水流をおいて末広がりの微妙な曲面をつくり上げた構図は光琳の独創といえよう。のちに光琳梅として愛好される花弁を線描きしない梅花の描き方や蕾(つぼみ)の配列、樹幹にみられる「たらし込み」、更に他に類をみない水紋など、こうした優れた要素が結集して、画面に重厚なリズム感と装飾性を与えている。本屏風が、光琳画業の集大成であるといわれる所以であろう。向かって右隻に「青々光琳」、左隻に「法橋光琳」と落款があり、それぞれ「方祝(まさとき)」の朱文円印が捺されている。津軽家伝来　（ＭＯＡ美術館・箱根美術館　名作美術品カレンダーより）

《目　次》

代表挨拶……4
感謝奉告①……11
感謝奉告②……13
二月度聖地行事・立春祭……16
教祖祭・紫微宮祭……17
シリーズ明主様(1)誕生……18
感謝奉告③……20
ブラジル信徒の信仰体験談……21
【21世紀を生きる】(5)……24
『観山亭』修復に参画……26

表紙の写真　雪の春秋庵

令和5年　課題

われよしの　心浄(きよ)めて　ひとよかれと
祈る心は　神に通へる

～明主様の示された「道」を求め、まっすぐ歩む～

代表挨拶

西村　正資

この仕組(しぐみ)　言(い)うてはならじ
言はざればならじと宣給(のたも)う常立(とこたち)の神(かみ)

（昭和二四年二月四日　明主様詠）

暦のうえでは大寒を過ぎ、立春を迎えたとはいうものの、未だ強い寒気が日本列島を覆い、〝春よ早く来い〟と唱えつつ、ついつい着こみがちになりながら過ごしています。

皆様には、そのような厳しい中にも、同志が支え助け合い、ご用にご奉仕にと誠をお捧げになられているご報告を沢山いただき、多くのご守護もいただいております。心から感謝を申し上げます。

立春祭

聖地では、二月四日『立春祭』が執り行われました。全国から多くの信徒がご参拝になり、意義深い祭典に祈りを捧げられました。

明主様は「節分」（立春）について、次のように語られています。

『神様の方から言うと重大な日なんです。特に一年一年節分が重大になって来る訳なんです。あんまり深い事は言えませんけれども、（中略）つまり浄化が旺盛になって来る。それが節分と六月十五日ですね。（中略）節々に浄化が強くなると言う訳なんで、ただ節分と六月十五日の異いさはあるんです。六月十五日の節(ふし)と言うのは、霊界が明るくなるんですね。火素が増える。それから節分の方は、そう言ったのでなく、神様のお働き――それが異って来る。節分が、夜の世界の罪穢れが清算される。すると、六月十五日の方は明るくなると言う様な――そんな様なものですね。（中略）信者の人で（中略）中々、古い人でも、かなり強い浄化が起るんですね。（中略）余程しっかり信仰を握って居なければ負けですね』（御講話集　昭和二七年二月五日）

私達は、普段日常の生活を主にした信仰との触れ合いをしています。そのため、改めて深く神様のご意思について意識することは、さほど多くないように感じています。しかし、時には世界のすべての運命を創造される〝神様のご意思〟に意識を向け、命を許されている者、天地の恵みを受けるものとして自らの足元を丁寧に見つめることも大切ではないでしょうか。明主様は、この天地創造の神様のご意思が分からなくては真の幸福はあり得ないと諭されました。

「夜昼転換」の時の到来

昭和六年六月一五日早朝、明主様は昇る太陽に向かって祝詞を奏上されました。その時、日輪のかなた、現実界を動かす見えない次元の霊の世界で、秘めやかな神事が厳かに行われたことを感得されたのです。

それは、霊の世界はそれまで〝夜の時代〟だったのですが、その日を境として次第に〝昼の時代〟に転換していくということでした。これを「夜昼転換」と教えられました。

霊界が夜の時代であった世界は、神の光が弱く、真実が闇に隠され悪が跋扈（ばっこ）し、人々は我欲に支配され、結果さまざまな不幸が相次いで起こりました。

反面、悪の隆盛によって、人智が成長し、社会制度が整えられ、物質文化が発達し、大いに人々の生活向上に寄与したことも事実です。その悪の働きも、やがて人々が幸せな天国世界を築くための、神の壮大なご計画（一時的な準備期間）であったのだとみ教え下さいました。

天国人となるための「浄化作用」

霊界が昼に転換することは〝いよいよ悪の世は終わり、精神文明の興隆がはかられ、善が栄える時代になる〟ということです。それは見えない霊の世界での善悪の壮絶な闘争の時代への突入でもあります。

善が栄える時代への転換は、大変結構なことですが、ひとつ大きな問題がありました。それは、天国の住人となるべき人々の魂に、長い闇の時代に積み重ねられた〝罪〟（くもり）が堆積し、このままでは天国世界の住人としての資格が無いということでした。そのため、魂のくもりを除去する大変厳しい浄化作用が必要となるのです。

神は浄化の厳しさをあわれみ、明主様に命じられて、その大浄化を積徳をもって楽に越せるよう〝み教え〟と〝浄霊の道〟を人々に許されました。

信徒にはそれを世界に伝える役割がある

そのことが、明主様に下った人類救済の神命であり、地上至る所に救いを間配るのが、明主様の救いにあず

かった信者である私たちの役割なのです。
同時に、明主様の信者はくもりの無い天国住人の有資格となるために、誰よりも先にお浄めを受けることも、自覚をしなければならないでしょう。
以上を説かんとされているのが先のみ教えです。

現実世界を直視する

私達はつい〝そう言っても、昭和六年から随分日時が過ぎている〟〝大浄化時代が来るといっても大したこと無いのではないか。これ以上悪いことは起きないでしょう〟等と、どこか遠い世界のことのように思い、ただ恐怖感を煽るだけと軽く受け止めがちになってはいないでしょうか。その方が気楽で気分良く日々を過せます。
しかし、今世界は、感染症に襲われて多くの方々が亡くなり、恐ろしい戦争が起こり、食料不足が起こり価格が高騰し、エネルギーを世界で奪い合い、世界経済は統制を見失い、トルコ・シリアで起こった大地震のように天変地異は地球のいたるところで発生。異常気象から、災害が世界規模で発生している、これが現実です。そして明主様の影を消そうとする働きに危機感を感じているのは、皆様も同じだと思います。

〝神の存在の証し〟に感じること

現実に明主様の信仰によって、あり得ない奇蹟、人智人力を超えた数多くのご守護を目の当たりにすると（当機関誌毎号掲載の感謝奉告）、その力の現わし主（神様）が訴えられている「夜昼転換」の神事と善悪闘争時代の到来、そしてすべての人々に求められた魂の浄化は、間違いなく推し進められるものと受け止めねばならないでしょう。
今年の立春祭は過ぎてしまいましたが、この教えは遅いということではありません。昭和六年から始まり、今年も、そして来年も進められていく神定めの経綸のことであります。立春祭では、今年も会員の皆様と共に、多くの方々に時の到来を知らせ、お浄めのご用にお使いいただきたいと、その覚悟をお捧げさせていただきました。
瑞雲郷の梅園では、厳しい寒風の中にも紅梅が咲き、後を追うように白梅の蕾も開き始めています。周辺では熱海桜も咲き始めています。
神様が創造されたこの世界は、森羅万象の定めに従い、何物にも左右されず留まることもなく、確実に進展していることを、改めて伝えられているように感じています。

『道』No.56一月号の感謝奉告より

愛媛のOYさんは、九〇歳を超えた今もなお、明主様への鋼のような強靭な信仰をおもちです。そして、裕かな人生に感謝をお捧げになっていますが、そこに至るまでの長年の信仰的試練は想像を絶するものがあります。また、その試練が今の幸せに結びついていると感じたのは、皆様も同じではないでしょうか。

明主様ご存命中のこと、肺病を救われ、その喜びで直ぐに病に苦しんでいる方々を浄霊されています。しかし村中から信仰を反対され、その流れで結婚に際してまで〝信仰しない〟という条件があったそうです。ですから同居する舅姑にも信仰を大反対されますが、それでも信念は揺るがず、〝心から良い嫁だと信じて貰えた時、救世教も理解してもらえる〟と覚られ、「自分を捨て、ご両親に素直に必死に仕えた」ということで、最後はそのご両親も信仰熱心となられたそうです。

今、社会にもそして家庭にも、一番欠けているのは互いの「信用」ではないかと思います。信じれないから争いが起き、戦争にも発展するのです。〝信用を受ける〟という大切な姿勢に気づかれました。そのため〝自分を捨てた〟とは、凄くないでしょうか。

明主様は『**悪口を言われるのは結構です。悪口は浄化で、それでこっちの罪が消えるんです**』と教えられました。明主様の信者は、皆神縁があり、因縁・系統でお傍に引き寄せられたのですから、幾多の試練があろうとも神様がおわします限り、そして自分が神様との御縁を手放さない限り、一途な信仰とみ教えの実践は、いつか必ず良き結果を許されるというお手本のように感じました。

今は、とても幸せなご家族に囲まれていらっしゃいます。まさにOさんのような信仰の先輩方によって、今日の教団があることを思えば、今度は、私達が頑張りますと宣言しなければならないでしょう。

沼津のTMさんは、持病が悪化した時、改めて自分の課題として自宅のトイレ掃除を始められました。すると他の汚れも気になりリメイクシートを貼るなど気持がどんどん前向きになっていったようです。当然家族にも喜ばれ〝皆の役に立つことができた〟という充実感と共に、心の明るさと元気が戻ってきたそうです。

それでも、浄化が少しでも厳しくなると、不平不満の心が湧き、有難いことすべてが消え失せてしまう自分の弱さも語られています。

Tさんは、そのような時こそ心を正そうと、み教えを拝読したりご浄霊をいただきに出かけるのは勿論ですが、自宅を綺麗にすることをはじめ、ミニ花を届けたり、綺麗な絵や写真を周囲に配ったりと、いつも行動を伴う努力をされています。辛い時にはなかなか難

しいことです。しかし、〝行動は、周囲から喜ばれることが多く力になる〟、と辛い時ほど行動をされています。心を正せるのは、自分しかいません。そのことに気づかれていますが、とても大切なことと思います。

鹿児島の垣本孝行さんです。平成二八年それまで元気だった次男崇志さんが、突然「急性骨髄白血病」という難病の宣告を受け、大きなショックを受けられました。ご自身は腰痛の悪化もあり、六〇歳で退職、リハビリ生活ばかりで、信仰的ご奉仕が何一つできていなかったと反省し、明主様にお詫びをされています。

瑞雲郷の梅園は実の成る梅なので香しい紅梅が咲き始めている

その後、さまざまな治療が始まり、家族も皆「おひかり」をいただいている強みもあり、浄霊に徹底して取り組まれ、一進一退を繰り返しました。

令和二年には、回復していた崇志さんでしたが、突然の再発。当時、直接聖地に届いたご守護願いを、緊迫感を感じながらお受けしたことを思い出します。

「医師との面談があり『いろんな治療をしてきたが効かない。あさってから新しい薬を試すが、これが効かなかったらもう手立てはない。副作用も強く現われる可能性もある』と覚悟を求められ、余命は一ヶ月ということだったそうです」と、泣きながらの報告でした。私も涙が溢れ、ご祈願の約束をしました。

不思議なことに、その直後、コロナで面会禁止になっているはずの病院から、「一日一時間、二人まで面会していいです」と、思いがけない面会許可があり、垣本さんと崇志さんの夫人が直接ご浄霊のお取り次ぎすることが可能になったのです。明主様がご浄霊を許してくださったとしか思えません。結果、その後の検査で癌細胞が消滅したことが分かったのです。

昨年三月、今度は脳腫瘍が発見されました。それも

「直ぐ手術しないと危険です」ということで緊急手術。無事成功しましたが、一一月には脳腫瘍が再発しました。垣本さんは、一二月一日聖地月次祭に参拝され、九州の信徒のお世話とお導きを決意されてお帰りになりました。

一九日には崇志さんから「脳腫瘍の影が消えた。数値も安定」と連絡があり、医師からは「消滅は、大変な話題。医学界では初めて。どう変化したのか分からない」と告げられ、大きな喜びと共に聖地に求めることの大切さを改めて感じられています。

『浄化は神の愛』とみ教えいただいていますが、そのように心から思えるには**『御神意を覚れ』**と明主様は求めていらっしゃいます。その覚りの大切な一つは、冒頭でも述べました〝世界はいよいよ夜の時代から昼の時代へ、罪を滅し徳の時代へと大きく転換を始めている〟ことです。

現界で、明主様がお働きになられる救済のお手伝いをさせていただくことは、大変尊いことです。霊界の祖霊様にとっても一大事で、一族郎党の栄えのためにも、子孫がそのことに参加して欲しく、さまざまな方法で知らせているのではないでしょうか。特に使命が大きく期待される方ほど、そうであろうと思います。

崇志さんの病は、決して簡単なものではありません。今後もいろいろな展開が予想されますが、一喜一憂せず、今日までの学びをよく整理されて、たゆまず前進されることをお祈りいたします。

徳島の宮脇和枝さんは、すでに当機関誌に一度感謝奉告されています。それは、直腸癌が、肝臓や肺への転移がみられ、厳しい病状でしたが、昨年の聖地地上天国祭へのご参拝後、癌細胞から多量の膿が出るという浄化が許され、八月には癌の影が消えるという奇蹟をいただいたのでした。

私が感心したのは、宮脇さんの信仰姿勢です。入退院を繰り返す中でも、少しでも動けるようになれば信徒仲間のお世話に働き、入院中でも信仰を伝えるという真摯な姿がありました。

そしてこの度、長年の夢であったお孫さんの「おひかり」拝受が許されることになりました。たまたま厳しい仕事への就職が決まったと聞かされ、〝時は今〟と決意し、娘夫婦の許可をとり、直接お孫さんに伝えたそうです。亡きご主人が、明主様への出会いから、人生観が変わり、救われたこと。ご恩返しをしたいと専従したこと等、正しく生きることの尊さを伝えられました。何とそこに居た二人のお孫さんが「いただきたい」と返事をしてくれて、涙が溢れたそうです。

これも「霊界から働いてくれた主人と、喜びと感謝を共有できました」と、明主様に感謝をされています。

前進！前進！何があっても、半歩でも一歩でも前進！と真摯に歩まれる宮脇さんの姿は、私にとっても、学

ぶべき姿です。

徳島のＭＫさんは、久しぶりの自宅浄霊会開催を楽しみにされていました。しかし、腰痛で歩行も困難になり、家族が暗に中止を促すも決意は固く、その家族から浄霊を受けることにも努められました。

そして浄霊会当日、先生のご浄霊直後、痛みが消え、立ち上がることができ、周囲に集まった仲間が感激のあまり、大きな拍手をされたそうです。思わず「明主様ありがとうございます」と言い、歩いてみると、またまた大きな拍手が沸き起こったそうです。素晴らしい浄霊会でしたね。私もその場に居たかったです。自宅であろうともご神業の場には、明主様がお越しになっている証ですね。また、高齢の美馬さんですが、身体が弱り消極的になるのでなく、神様にお約束されたことは、絶対に自分の都合で変更しないという姿勢にも学ぶところ大です。息子さんや娘さんからも「毎日みひかりをいただける」と感謝の奉告がありますが、素晴らしい家族愛を感じ、どのようにしたらそのような家庭になるのか、私もその神髄を学ばせていただきたいと思いました。おそらく、長年思いやりをもって、たとえ家族であっても敬いの心を第一に、信用を得て来られたのでしょう。

皆様のご奉告に、心から敬意を捧げ感謝を申し上げます。

今年の取り組みも始まったばかりです。

立春を過ぎ、神様のお働きも一段と強くなります。それは同時に向けられる期待も、さらに大きなものになるということだと思います。

善人は、〝集いそして力を合わせよ〟と、明主様から求められています。私は、皆様と心を合わせ、誠を合わせれば、あらゆることが可能になるように感じています。感謝の奉告はそれを伝えて下さいます。

明主様と共に、聖地と共に、尊い仲間と共に、栄えあれと、お祈りさせていただきます。

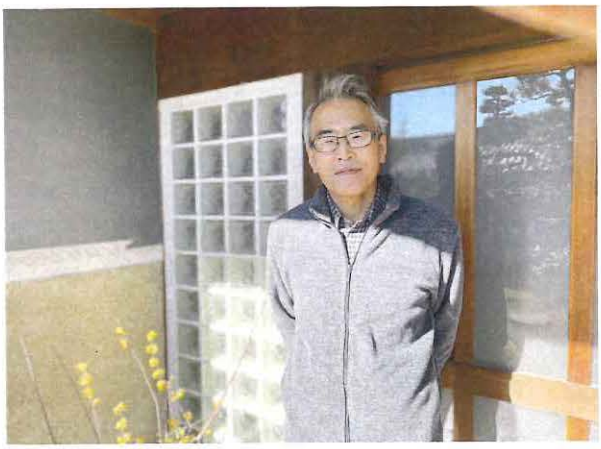
感謝奉告 ①

私の人生の転換

一宮グループ　安藤　均

令和5年を迎え、私のこれまでの信仰を顧ると共に、今年の願いと希望、抱負を述べさせていただきます。

私の信仰歴は56年になります。高校2年と記憶していますが、今でいう蓄膿症で悩んでいた際に母親の勧めで母と一緒に入信を致しました。母に誘われ、引っ張られて厭々布教所に参拝する程度でした。一方母は熱心に布教所に足を運んでいましたし、信仰仲間も与えられていたようです。



そんな信仰姿勢の中で、我が家にはあらゆるご浄化を頂きました。母の直腸がん、父の肺がんの浄化を頂きましたが、お蔭様で家族中で一生懸命浄霊に取り組み救われてきました。私も現在は鼻つまりとは全く無縁となりました。元来医者嫌い薬嫌いの私でしたが、ご縁があって製薬会社に勤務し、定年退社するまで薬業界に身を置いてきました。

令和4年11月に妻の真里が交通事故に遭遇し、大きなご守護を頂き感謝奉告をさせていただきました。実は、私も35年前の勤務中に、交通事故で命をお救いいただいた体験をしていましたので、その時のことを少し述べさせていただきます。

出張で急いでいた朝の通勤ラッシュ時の出来事です。愛知県庁近くの片側3車線の道路を横断中、無謀にも進行してきた車に衝突しボンネットにはね上げられました。側頭部がフロントガラスに打ちつけられ、ガラスはコナゴナに割れる大きな事故でした。そのはねられた瞬間、幽体離脱なのか身体がゆっくりと回っているよう感じ、地面に落ちた後目を開けたようです。地面に落下した直後、自然と頭に手をかざし自己浄霊をしていました。奇しくも運転していた方は同業大手の製薬会社の方でした。救急搬送もなく、社用車で近くの棚橋病院へ運ばれ、すぐにレントゲン検査を受けましたが、異常なしの診断結果でした。手櫛をすると頭髪と一緒にガラスの破片が混じっていましたが、打撲だけで出血はありませんでした。車から振り落とされ、スーツは破れカバンは損傷していましたが、その際の擦過傷のほうが痛く、帰宅して家族の勧めもあり、地元の一宮市民病院で再検査しましたが、頭も首も異常ありませんでした。しかし床に就いてからはひどい頭

痛が始まり、数日間激しい頭痛との闘いが続きました。家族から十分な浄霊を受け、入院もせずに10日間の自宅療養したのち会社に復帰できました。

その後月日が流れる中で、大きなご守護を戴いたにも関わらず、信者としての活動はしてきませんでした。名前だけの信者でありましたが、大きな信仰の転機が訪れました。それは聖地直結の会に所属したことです。母も妻も我が家では「神様、明主様、浄霊」を中心に信仰してまいりましたが、当時の一宮布教所で見聞きすることに疑問がたくさん出てきたことです。そうした中で「聖地直結の会」があるという情報を得て、祖霊大祭の帰途に救世会館の事務所を訪ねました。幸運にも則武代表・西村副代表に面会することができ、先生方のお話をお聞きし明主様信仰のあるべき姿を学ばせていただました。さらに、お二人の先生のお人柄に心服し、実りある聖地参拝をさせていただきました。これが聖地直結の会一宮グループのスタートです。聖地直結の会に所属はしたものの、私たち夫婦には信仰上の人脈、友人も少なく、どうしたら聖地直結の会の存在と活動をお伝えできるのか、正直困っていました。そんなある日、妻が買い物に行った時の事です。スーパーの入り口で赤塚美智子さんにバッタリ出会いました。妻は赤塚さんに自分たちが聖地直結の会に所属したことを伝えますと、赤塚さんも主之光教団の動向に疑問を持たれていて、赤塚さんの繋がりのある信者さんに呼びかけてくださり、現在一二世帯のグループができて参りました。

当初は一宮駅ビルの会議室を借り、毎月のように信徒集会を実施し、聖地から西村先生、太田先生、門埜先生がお越しくださり明主様信仰のご指導とご浄霊を取り次いで下さいました。コロナ感染拡大中は集会は出来ませんでしたが、現在は先生方のお計らいで、いづのめ教団「岩倉浄霊センター」をお借りして、毎月祈願参拝を開催しています。また一昨年からは家庭集会も浄霊会も拙宅や信者宅で開催し、太田先生、大島先生にお越しいただき、浄霊とみ教えの学びを継続実施しています。私は聖地直結の会に所属したお蔭で、信仰の学び直しができると共に、妻と一緒に浄霊訪問が許され、明主様信仰のありがたさ、素晴らしさを実感しています。私自身先生方からみ教えに基づいたご指導を受け、信仰実践がより身近になり、その重要性を感じているところです。

さて新しい年のスタートにあたり三つの希望・抱負を上げてみました。

①一宮グループの信者さんの幸福を願う。

聖地参拝から遠ざかっている信者さん全員の参拝が許されるようお世話にあたる。

浄化している信者さん宅への浄霊訪問を継続する。

②自然農法のすすめ

3年間続いている地元無農薬野菜作りサークルが、

化成肥料から脱客してＥＭ活性液を使用したボカシ肥料による自然農法へと転換できるように図る。
（樹木医養蜂業者と西洋・日本ミツバチでのＥＭ活性液を飲用した効能効果の検証を予定中）

③一般の方への信仰啓発

増大する医療費、医療信仰、薬漬けの現状を憂い、一般未信者さんに対し本当の自分の在り方を浄霊・み教えを通じて目に見えない世界の存在を理解して戴けるよう研鑽する。

最後になりましたが、今回の妻の交通事故の感謝奉告により、私の風化しかけていた35年前のご守護を思い起こし、改めて「生かされている実感」と「感謝の気持ち」を常に忘れないよう、そして「み教え中心の信仰生活と活動」に努力させて戴きます。

日々夫婦不随で皆様のお役に立てるよう頑張る所存でございます。

熱海桜とメジロ

感謝奉告 ②

み教えとご浄霊が力に!!

愛媛グループ　Ｍ　Ｔ

令和三年八月に趣味のテニスの最中、熱中症になってしまいました。

すぐに病院に行き、点滴を受けてその日は帰りました。しかし、熱は高く、血圧も上がり、上が一八〇、下が一〇〇と、身体の中が沸騰しているようでした。喉は渇いてカラカラなのに、胃が水を受け付けません。飲もうとすると吐き気がして飲めません。脱水症状を起こすので、毎日点滴に通いました。点滴を受けている間は喉の渇きもましなのですが、終わると喉が渇きます。でも飲めないのです。その繰り返しでした。

母からご浄霊をいただいていましたが、この時はメシア教に籍を置いていたので、三分間だけのご浄霊でした。

八回目の点滴の時、針を刺すところも無くなって、病院のベットで〝これはもう治らないかも〟と辛くて泣いてしまいました。しかし、何故かその日を境に状況が好転していきました。

熱中症の浄化は終ったかに思いましたが、秋に差し掛かった頃、今度は風邪を引いてしまいました。それ

が誘因だったのか、左耳が水が入った時のようにこもった感じになりました。そして一二月、耳鼻科を受診したところ「うーん、メニュエルかな？」との診断。それから、日に日に耳に水が溜まってきて、耳の周りをトントンと叩くと水の音がしました。そうなるとバランスが取れなくなって目眩がして、まるで雲の上をフワフワ歩いているようでした。

結果、車の運転も出来なくなり、仕事も休職しました。「迷惑を掛けるので退職します」と申し出たのですが、ありがたいことに、「辞められたら困る」と言っていただき、休職させていただきました。年末年始の忙しい時に、二カ月も休ませていただき、本当に感謝でした。

この間も三分間浄霊をいただいていました。この年の御生誕祭の折に「これからは、手を掲げる浄霊はいたしません」と言われ、絶望したのを覚えています。不信感がふつふつと沸いてきて、悲しくて切なくなりました。

お正月に帰省した娘が、メシア教の『祈りの言葉』を聞いて「お母さん、洗脳されてヤバイよ！もう辞めて！」と言って拒絶します。主人（未信者）とも相談し、メシア教を辞める決心がつきました。しかし、退会の申し出が突然の事だったので、皆さんをすごくビックリさせてしまいました。（これは反省していますが、相談すると引き止められると思ったので、突然の報告となりました）教会長からは、「『おひかり』を返して下さい」と言われましたが、「おひかり」は奪われることなく無事メシア教を退会して、聖地直結の会に移ることができました。

その間も、耳の浄化はずっと続いていました。友達から他の病院を紹介され、良い先生と巡り合うことができました。検査の結果、耳に膿が溜まり過ぎて、泡がふいているとのことでした。すぐに鼓膜を切開して膿を抜くチューブを入れました。それから毎日毎日膿が出ました。朝起きると枕に五百円玉大の黄色の膿のかたまりが四、五ヵ所くらい出来ていました。左耳は、聴力が落ち、時には出血することもありました。

不安で不安で泣いて過ごすことが多く、夏の熱中症からの辛い浄化続きで〝治るかなぁ。いつまで続くのかなぁ〟と思いながら、暗い毎日を過ごしていました。母から毎日浄霊をいただき、み教えも沢山読みました。

その間も一進一退で「入院しましょう」と二回位勧められましたが、薬も飲まず、入院も回避しました。七月位までは、毎日膿が出ましたが、膿が止まると段々聴力も戻り始め、昨年一二月の聴力検査では、右も左も差が無く聞こえるまで回復しました。コロナ前には、年に三～四回は熱が出ていましたが、コロナ流行後、二年位は熱も出ていませんでした。二年間の毒素が、耳から出たんだと思います。

また、この間に、家族間のトラブルがありました。

そのストレスが耳の浄化を長引かせたのかもしれません。しかし、耳の膿が出なくなった頃からトラブルも良くなっていきました。

今も通院は続いていますし、疲れたりすると聞こえが悪くなったり違和感が出たりもします。また、完全にトラブルの相手と和解したわけでもありませんが、現状はすごく良くなりました。

改めて、仕事が出来ることに感謝
耳が聞こえることに感謝
家族が元気なことに感謝

感謝、感謝と言いながらも、都合の良い時だけしか感謝して来れなかったことに気がつきました。そして、今まで耳が聞こえることに感謝したことなんてありません。当り前だと思っていましたから。

この浄化を通して、病気のことだけでなく、さまざまなことに気づくことができるようになったこともご守護であり、自分自身今までよりは成長できたのかと感じています。

明主様、いつもそばに居て下さり、本当にありがとうございます。これからも、明主様から離れません。私もこれから、明主様のように、誰かのそばに寄り添えるようにならせていただきたいです。

水晶殿改修工事に伴い、救世神殿横東屋付近に移植された樹齢約三百年の白枝垂れ梅

箱根光明神殿で執り行われた立春祭は、様々な予防対策が図られる中、新型コロナ感染前に近い参拝者の受入れが実施された

熱海救世神殿で斎行された立春祭。参拝席は感染対策が緩和され、一席おきの着座が可能となった。この日の参拝者は、1,200名余

光明神殿で斎行された紫微宮祭に続き、奥津城では雪の降りしきる中、御墓前祭が執り行われた

明主様御昇天68年。祭典後、中居相談役から、明主様に側近者としてお仕えした時の学びをつまびらかに語られた

シリーズ　明主様(1)　〝誕生〟

世界救世教教祖・岡田茂吉が、隅田川に沿う浅草、橋場の地に生をうけたのは、近代日本の国家揺藍（ようらん）の時代、さまざまな矛盾を孕（はら）みながらも理想の国家の姿が、国をあげて模索されつつ、着実にその歩みを進めていた明治一五年（一八八二年）一二月二三日のことである。

奇しくも一二月二三日は冬至の翌日にあたっている。冬至は一年のうちでも陽のさす昼の時間がもっとも短い日で、二三日はふたたび少しずつ陽のさす時間が長くなり始める、まさに日に向かう第一日目なのである。それゆえに洋の東西を問わず、冬至をめぐって、万物の命の根源である太陽の光を尊び、光が甦り、新たに生まれる時として祝祭をあげる信仰が生きていた。

〈中略〉

教祖が生まれた橋場の町は、浅草の東の外れにある。その昔、石浜庄（いしはまのしょう）と呼ばれ、戦略上の要地として、事あるたびに戦の場となった土地である。かつて源頼朝は兵をあげて鎌倉にはいる途上、この川に舟を並べて浮橋を設けたが、その場所が現在の橋場であったといわれる。このように、浮橋や細い木橋が、流され失われしながらも、何度か構築され、架けられてきたのが橋場で、その由来が地名となって今に残っている所なのである。

明治の初めごろ、ここには「橋場の渡し舟」が通っており、川辺に生い茂る葦を分けながら、その渡し舟がのどかに川面を往来し、貴重な交通機関の役を果たしていた。〈中略〉

川沿いの一等地や街道筋には、富裕な人々の邸宅や立派な構えの商店も見られたが、一歩細い路地に踏み入れば、そこには貧しい家々が多く、その日その日を倹（つま）しく送る庶民の町であった。両側からせり出した軒先には洗濯物がぶら下がり、共同井戸のまわりでは赤児を背負った女たちが、どこそこの家が夜逃げしただの、米の値が上がって何か質に入れなければやっていけないなどと、世間話に花を咲かせながら、粗末な着物の裾をはしょって忙しく洗濯をしている風景があった。そうした土地柄なのである。〈中略〉

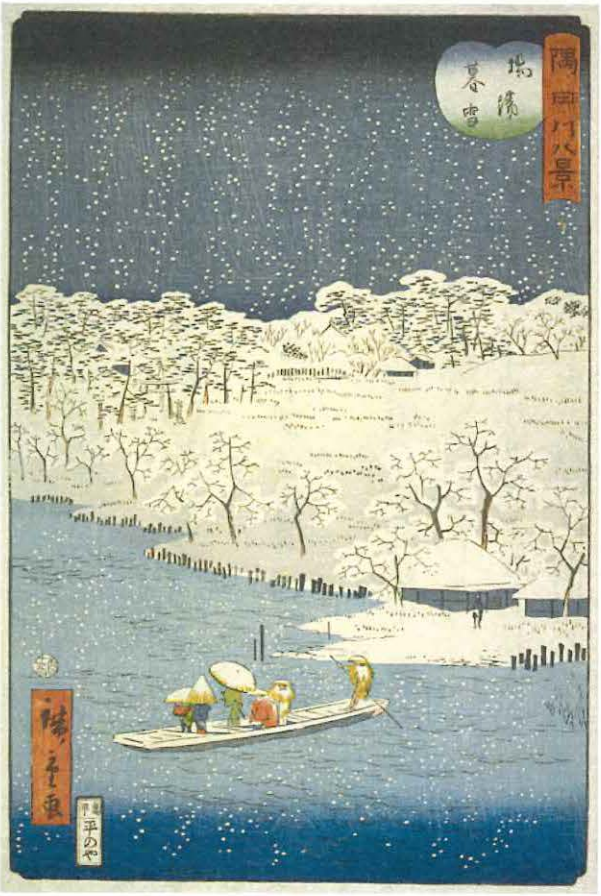
教祖が生をうけた橋場は、このような貧富の間（はざま）に息付いている町であった。

教祖の一家は、父母の岡田喜三郎、登里（とり）のもとに、姉・志づ、兄・武次郎の五人暮しであった。いま一人、は留という姉があったが、教祖の生まれる一年前に早く世を去っていた。

このころの生活について、教祖は後年つぎのように記している。

「私の生れたのは東京都浅草橋場という町の貧民窟であった。今も微(かす)かに覚えてゐるが、親父は古道具屋で店が三畳位、居間が四畳半位の二間きりであった。そこから十町位（一キロメートル余）ある浅草公園に毎晩夜店を出しに行ったものである。

私が物心がついてから父からよく聞いた話であるが、今夜幾らか儲けないと、明日の釜の蓋が開かないというので、雨の降らない限り、小さい荷車へ僅かばかりのガラクタを積んで母は私を背負い、車の後押しをし乍ら行ったという事である。そんな訳で赤貧洗ふが如く、母は今でいう栄養失調という訳で、乳が碌々出ないので近所の蓮窓寺という寺の妻君に乳貰ひに行ったものである。それから私が小学校を出る頃、家計も漸(ようや)く多少の余裕が出来るようになったので、美術学校へも入いれたのである。従而子供の頃と、世帯を持ってからも、相当期間貧乏の味と金の有難味を充分植えつけられたので、それが非常に役立ってをり、今以て無駄と贅沢は出来ないのであるから、寧ろ其頃の逆境に感謝してゐる次第である。」



隅田川八景橋場渡之図

当時の貧しさが彷彿とされる一文である。

喜三郎親子が夜ごと商いに出かけた浅草公園は、そもそも山号・金龍山、寺号・浅草寺の境内地であった。この寺は天台宗（太平洋戦争後独立、聖観音宗総本山となる）に属し、本尊は宮戸川（隅田川）で網にかかった一寸八分（約五・五センチ）の黄金の聖観音（相好円満で大慈悲心を表わす仏）であるという言い伝えがある。

（次号へ続く）

『東方の光』（上巻）より

感謝奉告 ③

ご祈願とご浄霊でご守護いただく

東大阪グループ　前坂　ミネ子

昨年の一二月一〇日、夕方6時頃、帰宅途中、買い物をと思い、いつもと違う道を急いでいました。

冬の夕方は、あたりは暗く人通りもあまりありませんでした。少しでも近いところをと斜めに横切ろうとしました。歩道と車道の区別がわからず、足を踏み外ずし、車道上に強く転んでしまいました。右胸当たりを強打し、少しの間起き上がることができなくて、そのまま横になっておりました。どこからともなく、二人の女性が近づいて来て、「どこか痛いところはありませんか」と声をかけて下さり、私はとっさに「胸が痛い」と言うと、すぐに救急車を呼ぼうとされたのですが、「すみませんが抱き起してほしい」と言って、手を借り起こしていただきました。

無事に立つことができたので、「救急車は大丈夫です。ありがとうございます」と、お礼を言って家に帰ることができました。

一晩休めば大丈夫と思い、すぐ横になりました。ところがその夜、一晩中痛みで眠れず、夜が明けるのを待って、娘に電話しました。また、その日はセンターの月次祭で友達と駅で待ち合わせをしていました。早く連絡をと思い、豆井さんに電話をかけて、行けなくなったことを伝えていただきました。早朝にもかかわらず、聖地にも御祈願をしていただいたそうです。

日曜日でしたが、娘の車で、救急外来でレントゲンをとってもらったところ、肋骨にヒビが入っているので、シップ薬と痛み止め、あとはサポーターをして胸を固定し、安定にしていることしか治療方法がなく、医師は「3週間位は痛みますよ」とおっしゃいました。

その日から年末の忙しい中、たくさんの信者さんがご浄霊に来てくださり、10日間位で痛みもずいぶん軽くなり、本当にに嬉しく、大神様、明主様のお光はあらためてすごいなと思わせていただきました。

年末には、家の中ですが、お正月の準備をすることができました。

この度の浄化は本当にご守護だと感じました。このケガが足とか腰でしたら、即入院になり、老齢ですから長い時間がかかると思われ、〝これから先社会復帰できたかどうか〟そのことを考えますとゾッとします。

その日から、自分の足で歩けるということがどれ程大きなご守護か、また時期がもう少し後でしたら年の瀬も押し迫り、お正月も神様のこともできなくて、新年早々憂うつな生活になっていたと思われます。

大神様、明主様には、大難を小難にすませていただ

き非常に大きなご守護を賜りましたこと、感謝にたえません。聖地でのご祈願、並びに大勢の信徒の皆様のご祈願とご浄霊によりまして、お蔭様で思いもよらず早く普通の生活に戻ることができました。本当にありがとうございました。

今は、豆井さんと一緒にご浄霊の訪問に行かせてもらったり、グループの方々の「道」を我が家に送ってもらい、お配りしたり、また取りに来る人もあったり、会合をもったり、我が家を御用に使ってもらっています。これからも、年齢相応の御用が許されますよう、祈ってまいります。

前坂さんと豆井さん（右）

ブラジル信徒の信仰体験談

明主様、私にお任せください

リタ・デ・カシア・セルカル・ロドリゲス・デ・リマ（女性）

皆様、おはようございます。

私は46年前に入信が許され、現在は資格者としてパラナ州のクリチバ教会で御用を頂いております。同教会では管轄区域を複数のエリアに分け、それぞれのエリアに暮らす信者さんのご家庭をそのエリアの担当者がお世話するという取り組みを行なっておりますが、私は今そうした取り組みや未信者さんのお世話の責任者を務めさせて頂いております。

本日は皆様に、明主様と出会う前と後で私の人生がどう変わったかについてお話をさせて頂きたいと思います。

私が生まれ育った家は、両親と3人の兄弟、そして私の6人家族。病気や家庭不和、逼迫した家計という、いわゆる病貧争の三苦に喘ぐ家庭でした。当時まだ若かった父は家族に少しでも良い暮らしをさせたいと一生懸命働き、ついには二つの仕事を掛け持ちするようにもなったのですが、まさにその頃、母が病を患い、度々意識を失うようになってしまったのです。

母はてんかんと診断され、処方薬を常用するようになりました。ところが発作は激しくなる一方で、家事や4人の子育ても思うようにできなくなってしまいます。

母はその後、白血球減少症（血液中の白血球の数が減少する病気）にも罹りましたが、病はそれだけではありませんでした。慢性的な不眠が原因で半年間もの入院生活を余儀なくされて以降は、寝たきりで脆弱になり、めまいをはじめ、内耳炎や副鼻腔炎、身体衰弱やウツにも悩まされるようになってしまったのです。

そうした苦悩から解放されたいと、母は幾つもの宗教を訪ねましたが、明主様との出会いが許されたのはそんな頃のことです。当時、時々私たちの服を縫ってくれていたご近所の仕立屋の女性が実は信者さんで、母が数々の健康問題に悩んでいることを知ると、「神様の御光をお取り次ぎさせてください」と言って母にご浄霊をしてくださいました。なおその時その女性は、明主様のことを「花を愛する日本人」という言葉で母に紹介したそうです。

すると何とそのたった一度のご浄霊で、それまでしばらく寝たきりだった母がベッドから起き上がることができたのです。

その時のことは今でもはっきりと覚えています。当時13歳だった私はその日、放課後の帰路を浮かない顔でとぼとぼと歩いていました。酷く空腹であったことに加え、「帰ったら昼ゴハンの支度をしなきゃいけない」という思いが私を憂鬱にさせていたからです。

ところが帰宅し玄関を入ると、おいしそうな料理の匂いがふわっと漂ってくるではありませんか。見ると、テーブルもキレイに片づけられています。朝食の残りが散らかっているはずのテーブルにはテーブルクロスがかけられ、その中央にはコップに生けた一輪の花が、そして台所には料理をする母の姿がありました。

その光景を見た瞬間、私は天にも昇るような気持ちになりました。そして私の姿に気づいた母は私に近づき笑顔でこう言ったのです。「今日ね、お花が大好きっていう日本人から〝光〟を頂いたのよ」と。その時の母の言葉を私は決して忘れません。私は母をぎゅっと抱きしめ、〝この幸せが永遠に続いてほしい〟と泣きながら願いました。

どこかが痛いといった様子もなく、自分の足でしっかりと立つ母の姿、そして何より希望に満ちたその表情を見た時の感動は言葉では言い尽くせません。そしてその瞬間、私の心にも、人の人生を変える力を持つその日本人のことを知りたいという思いが芽生えました。

その数日後から私たちは教会に通い、ご浄霊を頂くようになりました。母は初めてご神前に立った時、明主様にこうお話ししたそうです。「あなたのことはまだ存知ません。でもあなたの光が持つ力を感じること

はできました。もしあなたが私を癒し、子育てすることをお許しくださるなら、私は生涯この道を歩んでまいります」と。

こうして一九七四年六月二二日、私たちは「おひかり」を拝受いたしました。すると正にその月、父が教育文化局に局長顧問として転職し、それまでの12倍の年収を得るようになったのです。

私たちの生活は劇的に改善されました。粗末な家に別れを告げ、閑静な住宅街へ引っ越すこともできました。布教所の受付でご奉仕をするようになった母は明主様から益々御力を頂き、それからはもう寝たきりになることもなくなりました。

こうして明主様の御光と出会い、揺るぎない信仰を確立した母は幸福な人生を送るようになりました。そして悩み苦しんでいる人を見れば、いつでもすかさず浄霊の手をかざし、数え切れないほど多くの人々に明主様の御光を広めていったのです。

母はその後、72年の生涯に幕を閉じるまで健康にも恵まれ、〝揺るぎない信仰〟という財産を私たちに遺してくれました。

実はこうした思い出がよみがえってきたのは、御生誕祭を迎える心構えを整えていたある日に言われた教会長の「私たちは明主様を頼りにするけど、明主様も私たちのことを同じように頼りにされるんですかね」という一言がきっかけでした。私はその瞬間、明主様がかつて母を救ってくださったように、その御光で今も私たち家族を照らし、お救いくださっていることを覚り、明主様に対する揺るぎない信仰を更に深めることができたのです。

私は健やかに成長し、結婚して家庭を築くことも許されました（家族5人全員が信者です）。加えて二〇〇八年には資格者となるお許しも頂きました。

明主様の御教えと御守護がなければ、自分の人生はどうなっていたのか見当もつかないほど、明主様との間に強い信頼の絆を築くことができました。まるでドラマのような忘れ得ぬ出会いをご用意くださり、私たち家族の人生を大きく変えてくださった明主様には感謝しかありません。

本日私はここグァラピランガ聖地のご神前で、明主様に「どうぞ私にお任せください。明主様のお道具として何でもさせていただきます」と申し上げたいと思います。

今後も、できる限り多くのご家庭に私たちと同じようなご守護が許されるよう一生懸命励んでいく所存です。

明主様、お誕生日おめでとうございます。

ありがとうございました。

新連載『21世紀を生きる』（5）

「死生観ということ」

高頭　和生

今年は年明け早々、親しい知人の逝去がつづきました。親族に寄り添い葬儀の準備をお手伝いすることもありました。死ということについて改めて考え、どのように受け止めるかということを、遺族や葬儀のお手伝いする知人たちと共に考えました。そこで出た結論は、「どのように生きるかが大切」ということでした。また、死から目をそらさず、向かい合うことで、明主様の御教えがどれほど人生にとって大切で必要なのかということを改めて学ぶことができました。

「死」対して三つの真理があるということを聞いたことがあります。それは「一生は一回で、必ず死ぬ」、「死ぬ時期はだれもわからない」、「死んだあとどうなるかわからない」ということです。これは、裕福なひとでも、権力を持っているひとも、高学歴であっても、貧しいひとであっても、若くても、高齢者であっても平等である理（ことわり）と言います。確かにそのように思います。

「一生は一回で必ず死ぬ。」ということは小学生でも知っていることですが、普段はなかなか意識して生活していませんでした。歴史ドラマなどを見て、志半ばでの討たれ死にや、病で若く亡くなるひとなどをみると残念に思い愁いみますが、例えば戦国時代の武将たちは当然ですが現在の令和の時代にはみな生きていません。数百年単位の歴史からみると、そのひとの生きた長さよりも「何を歴史に残したか」、「どのように生きたのか」ということのほうが大切のように思います。私は今回のことで、一回きりである一生の半分以上を経過していることを認識しました。

また「死を迎える時期」は誰にもわかりません。とかく平均寿命と比較して、若い人は未来を希望しますが、いつ何が起こるかは誰にもわかりません。東日本大震災は、多くのひとの犠牲をもって、そのことを私たちに教えてくれたように思います。今日は元気であっても、明日何かの事故で終わってしまう運命かもしれないということです。これも再認識いたしました。

そして最後の「死んだあとのこと」ですが、幸いなことに私たちは明主様からみ教えいただいています。霊の存在、霊主体従の法則、霊界には一八一の階層があり、だれでもが何処かに籍を置いていること。その位置が高いほど幸せになること。そして生きるということは、その魂の位置を向上させる機会であること。さらにその魂を上げるためのノウハウを、こと細かに解説してくださり、生きる目的は「地上天国建設であるということ」を教えてくださっているのが明主様の

み教えです。私たちはこのことを信じて生きることができることは大きな特権のように感じます。

今回、知人の死をまのあたりにして葬儀に向かい合う中で、ふと自分の人生を振り返ると、都合の良いことは信じ、都合が悪いときは目をそらしてきたように思います。どうしても日々の生活の中では、死について、すなわち「どう生きるか」ということから目をそらしていた自分でした。信仰を理屈では解ったような気になっていましたが、日々の意識、生活の一瞬一瞬に照らし合わせていたかどうかと捉えるととても恥ずかしくなりました。全て一期一会であり、この一瞬は二度とないのです。

アップルコンピューターの故スティーブ・ジョブズ氏が、二〇〇五年にスタンフォード大学の卒業式で行ったスピーチを思い出しました。「17才の時、私はこんな文章を読みました。『一日一日を人生最後の日として生きよう。いずれその日が本当にやって来る』。強烈な印象を受けました。そして33年間、毎朝鏡をみて自問自答しました。『今日が人生最後だとしたら、今日やることは本当にやりたいことだろうか？』」。彼は治療不能なガンで、医師から「余命は3ヵ月から6ヵ月」と宣告されていました。心をうたれたのを思い出すとともに、今の自分にとって大切なメッセージだと受け止めました。

私たちは「死」について目をそらしてしまいがちです。人間にとって最大の恐怖であり、最大の謎でもある「死」について、正面から向かい考えることは大切なことだと思いました。目をそらさず向かい合うことで、その先に「どのように生きるのか」、「どのような人生を全うするのか」ということに向かい合うことができます。私は「今日、いち日を大切に」、「今の一瞬を大事に」と考えることにつながりました。そのために明主様のみ教えがどれほど大切なのかということを気付かされました。「世界中のひとが幸せになるために（地上天国建設のために）、明主様にお使いいただける神さま中心の生き方がゆるされること」を、自分に言い聞かせて生きて行こうと思います。

令和五年、六年、七年と五六七（みろく）がはじまる年の初めに、このようなことを気付かされたことに感謝いたします。ありがとうございました。

『観山亭』屋根修復に参画

観山亭と箱根美術館

さる1月13日未明、関東周辺に強い季節風が吹き荒れました。箱根神仙郷では、明主様が晩年ご神業の場としてご使用になられた「観山亭」こけら葺き屋根に被害がありました。専門家の調査の結果、屋根全体の老朽化も進み、この機会に大きな修復が必要との結論が出ました。

当会では、2月3日役員会に緊急議題としてこの事案を取り上げ、現状における会員諸氏の精一杯の誠を包括世界救世教に奉納させていただく決定をし、速やかにお届けさせていただきました。

五年前、わずかな会員と共に当会が発足し、今日まで包括世界救世教にお支えいただいてきたことを振り返りながら、ささやかとは言えども明主様にご恩返しが可能になってきたことを考えますと、隔世の感があります。

聖地建設にお仕えできる歓びを噛みしめながら、関係者各位に感謝のご奉告を申し上げます。

《参考資料①》「観山亭の屋根葺き」景仰392頁

《参考資料②》令和2年　配付した先達の信仰記録「米六俵」より

「昭和19(1944)年5月には、箱根強羅の藤山雷太氏(日本商工会議所会頭・藤山愛一郎氏父君)の別荘をお買い上げになり、東京上野毛から御移転になられ、地上天国雛型としての別邸御造営に着手遊ばされたのであります。もとよりその道第一人者の職方に依頼されたのでありますが、何よりも白米が尊重された戦時下の御建設でありますので、明主様におかれましては、御自身は高粱（中国産モロコシ）、ひき割大豆などの代用食に甘んじられ、職方には銀しゃり(白米)を供しつつ、工事をおすすめになられる御熱意に対し、お弟子方も精一杯御献金やお米の御奉仕をされたのは、申すまでもありません。建築職は大勢で毎日のこと、運んでも運んでも銀しゃりは不足がちとなり、ついに明主様には工事断念のやむなきに至られるのですが、普通の建造物ではなく、地上天国雛型としての、人類救済という御経綸の基本にかかわる事業であるだけに、断腸の想いであられた事と拝察申し上げるものであります」

【明主様】

『すると不思議なるかな、突如として一信者が、白米六俵をトラックに積んで来て寄贈されたのである。私はハハア神様は工事を中止してはいけないといふ思召しだなと思って、工事は休む事なくそのまま続行し、21年8月出来上ったのが今の観山亭である』（昭和25年　地上天国できるまで）

瑞雲郷の紅白梅

世界救世教　明主様と聖地に直結する会

（聖地直結の会）

〒413-0006

熱海市桃山町26-1　救世会館１階

電話　0557　85　8060

FAX　0557　85　8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp

No. 57 2023年2月15日発行

福は内　鬼も内